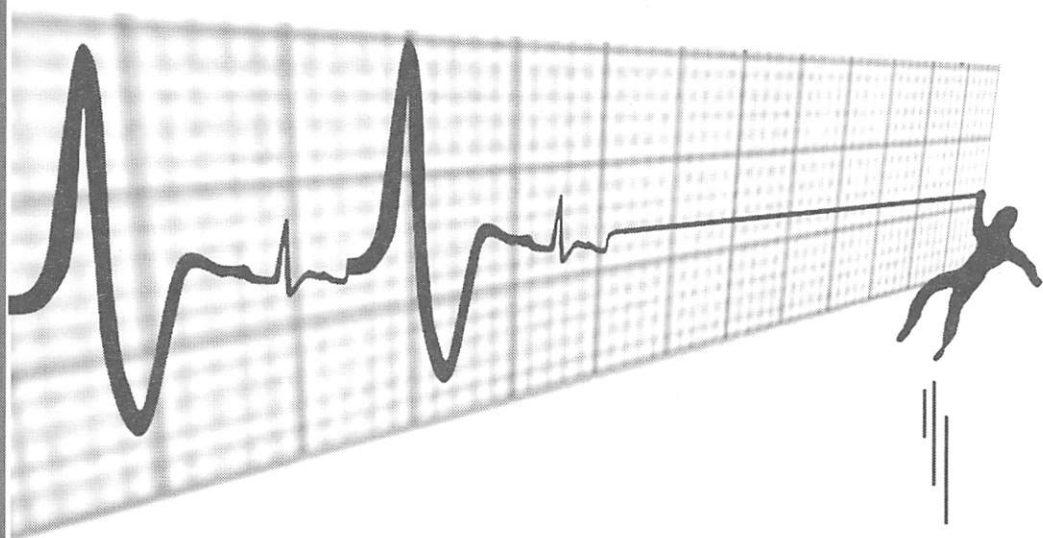


平成18年
12月号

250円

やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



「死者の目は開けられたままのこともある。しかしなぜその目はものを見ていないのだろうか？ 肉体という兵舎の、細胞という兵士たちはなぜ散っていったのか、なぜ作用しなくなったのか。答えは簡単である。司令官がそれを残して去ったからであり、魂という太陽が沈んだからであり、……」
p.20

まず計画を
聖なる旅路—2
魂のためのダイエット
年老いた人々へのメッセージ
魂と死
与えられた命の重み
『ワンダフルライフ』



先頃、もう何年も前に習っていた合気道の恩師が亡くなりました。社会人になってから2年程通った道場でしたが、体を動かす快さのみならず、稽古を通して自分自身に向き合い心の使い方を学び様々な出会いもあった思い出深い時期でした。今回の突然の訃報には少なからずショックを受けましたが、人は誰でも死を免れないものです。私を含め数知れない人々が先生から多くを学び、その恩恵は何らかの形で周囲にも波及し今後も伝えられていこうと考えると先生は素晴らしい使命を果たされたのだと思え、私の気持ちも静まりました。ただ以前、病気で入院し手術された際にお見舞いもしなかった不義理が悔やまれてなりません。

身近な人の死は、普段は頭の片隅に追いやられている死というもの私達に考えさせる大きな契機の一つとなります。死は大抵大きな恐れをもって捉えられます。死の前に味わうかもしれない精神的肉体的な苦しみ、愛する人との別れ、やり残した事柄に対する後悔等・・・

自分自身や家族、友人に何時訪れるとも分からない死を常に念頭に置くように努力することで、誠意を尽くしてこの世を生きることにも近づけるのではないのでしょうか。また、思考や判断を司る脳や私達の行動の元となる身体など、死のよって失われてしまうもののこの世の生活で重要な役割を果たす肉体的なもの、肉体を越えて精神的なもの、魂のそれぞれの役割や意義も死を通して垣間見ることが出来るのではないかと思います。

編集部より	2
まず計画を	4
祈りのある毎日へ	5
キノコの炒め物	5
リダ (甘受)	6
預言者としての任務における誠実さ	10
聖なる旅路 2	13
魂のためのダイエット	16
年老いた人々へのメッセージ	18
魂と死	20
与えられた命の重み	24
『ワンダフルライフ』	25
1年後の入院記～退院までの日々 編～	27





奉仕への意識

人々への奉仕を目的としていない人生は、様々な欲望が渦巻く野蛮な生き方とどんな違いがあるだろうか。

正しさ、事実へ向かう道におけるあらゆる行動に拍手を送ることは、真実に対して敬意を抱いていることの現われです。真実が単に自分の専門や生き方にのみ存在すると思いついでいる人は、遅かれ早かれ一人ぼっちになると同様、真実への見解においても常に変化を見せ、決して安定することがないだろう。

各段階の代表

それぞれの段階を代表する者にとって、正しさ、任務への意識、同段階にいる他の人々と比較してより高い見解、今日と共に未来をも見据えて把握できる力、何があっても高潔さを守って生きることが必要である。統治を行なう人にこれらのどれか一つが欠けていることは深刻な不足を意味し、彼が代表している人々にとっても不幸なことである。

内面と外面の一致

世界をただそうと努める人は、まず自らをただす必要がある。そう、まず彼らの内面が憎悪、敵意、嫉妬から、外面もあらゆる不適切な行動から清められることが必要である。それであってこそ、周囲への模範となれるのだ。自分の心をコントロールできない、我欲と格闘していない、感情世界を征服できていない人によって周囲に送られるメッセージは、それがどれほど輝かしいものであろうとも、人々の魂に興奮をもたらすことはなく、もしもたらしたとしても継続的な影響を及ぼすことはない。

理想的な魂

人々に明かりをもたらす道を行く者は、いつでも彼らの幸福の為に奮闘する者達である。人生における断崖や絶壁において人々に手を差し伸べ、自らを認識している崇高な魂の持ち主である。彼らは自分の生きる集団の守護天使のようであり、集団を襲う災いと戦う。嵐を受け止め、火事の上を歩き、衝撃に対し常に油断なく身構えている。

任務を選ぶ時は、その任務の遂行に適しているかいないかを第一の基準と認識することは、真実へ敬意を抱いていること、ものを見る眼があることを示す。周囲の様々な魅惑的なものに気を引かれても、戸惑うことなくその道歩き続ける者は、将来の幸福な設計者となるだろう。

崇高な意志

崇高な意志、高尚な性質は、5万回鍋でゆで、何回となく様々な型に押し込められたとしても、その特性を何も損なわない。その本質を守るだろう。日に何度も考えや道を変える、意志のない人たちに対しては何というべきだろうか。

よそ者とされる人

それは故郷や祖国から遠くはなれ、親友や父母から離れている人のことをいうのではない。それは暮らしている世界、所属している集団によって、その状態やその生き方が理解されない者、崇高な意志、あの世への思い、他者の為に自分の喜びを犠牲にする行為、驚くような努力によって、利益や儲けを考える人たちとしばしば対立し、周囲によって変わり者として詮索され、あらゆる行為が受け入れられずにいる人のことである。

民族の道

私たちの道は、民族や祖国の為、あらゆるよい行為や企画に拍手を送り、それに奉仕を行なう聖なる軍隊を支える道である。背信や変更は認めないし、呪いに「アーミン」ということもない。

統一の意識

皆、自分の側に降伏がなされることを求める。和平を求めている。しかしアッターは、「全体として平和を受け入れなさい」とおっしゃられているのだ。

さあ、私達が一体になれないのだとしても、せめて仲たがいはせずついにしよう。私たちの間にある問題や違いを膨張させるのはやめよう。

集団に対しては、アッターの特別な一つの恵みがある。それはどれほど努力しても、最も優れた個人であっても、手に入れることはできない。

まず計画を

何らかの仕事、企画を計画する時は、計画を達成させる要素と共に、妨げとなるものについても確認しておくべきである。あとで現れてくる諸問題によって運命を非難したり、私達を信用している人々の信頼が損なわれたりすることのないように。

計画

アトリエや工場は、しっかりした計画や採算性に基づいたものであれば、継続性と将来を約束するものとなる。それに対し、その基盤にしっかりした思想、基盤に基づいた計算が存在していなければ、失敗という結末を迎えることは不可避となる。民族全てに関わる事柄はどうだろうか。国家の統治、そして人間という、全方向が全てパズルのような理解しがたい存在が、人間性といったものに高められることは・・・。

常に勝つ、強きお方よ

常に共におられる、情愛細やかなお方よ

眠る事なく監視するお方よ

時を越え、立ち続けるお方よ

死なず生きつづけるお方よ

消滅せぬ王者よ

消滅せぬ永遠なる者よ

すべてを知り給う全知者よ

なにもものも必要としないするおよ

完全無欠の力強きお方よ

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎からお助け下さい。*



キノコの炒め物

材料：キノコ（どんな種類でもOK） 適量

塩 適量

コショウ 適量

パイヨン 1個

バター スープスプーンに半分量

作り方：

1.キノコ類をスライスする。

2.鍋にキノコを入れる。

3.2へ水が浸るくらい入れる。

4.中火で15分程煮る。

5.キノコがしんなりしてきたら、バターを加える。

6.5へパイヨンを加える。

7.5分程したら火を止める。

8.塩、こしょうを加えて出来上がり！

冷めても美味しいです。

*偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌルカビール）には、祈願（きがん）、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鎧が必要です。本来、偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌカビール）が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。



リダ 甘受) 1*

リダ 甘受)は不幸に対して嫌悪や反抗を示さず、運命のすべてに不平を言わず、より良^べくは平穩^{へいげん}のうちに受け入れることを意味します。言い換えると、普通は苦痛や恐怖をもたらすような出来事であっても、すべてを歓迎するということです。リダの別の定義は、自分たちにとって喜ばしいように見えることであっても嫌なことに見えることであっても、アッラーが自分たちになさることを喜んで受け入れることです。

精神的旅路のはじめにおいては、信仰する者は自分の自由意志としてリダを行わなければなりません、実際には、それはアッラーからの愛する者たちへの直接の贈り物と言えます。そのため、忍耐とは違って、アッラーも預言者 彼の上に平安と祝福がありますように)もそれを命じられはしませんでした。ただ、勧められただけなのです。預言者の話として伝えられたものとして、(不運に耐えず、アッラーのご意思を甘受しない者は、別の主を持つ者である)という話がありますが、ハディース学者たちはこれを真正なる預言者のハディースとしては認めませんでした。

信仰の深い人たちの中には、リダは信頼や服従よりも高い状態だと考える人たちもいますが、他の状態と同様に、リダも時として現れ時として消える、アッラーからの贈り物もしくは輝きだと考える人たちもいます。さらに、クシャイリ師など、はじめはしもべの自由意志につながり、それに依存しているものだが、終わりに、心の状態となるものだと考える人々もいます。「アッラーを主、イスラームを宗教、ムハンマトを預言者とすることを喜ばしく感じる者は、信仰の喜びを味わった」というハディースは、終わりにアッラーからの贈り物になるとしても、私たちははじめには自分の自由意志でリダを得るようにすべきだと示しています。

アッラーが神であることに満足するということは、アッラーを愛し、アッラーにしかるべき畏敬の念を抱き、崇拜行為にまた助けを求めてアッラーに向かい、そしてすべてをアッラーからのみ期待するということの意味します。アッラーが主であることに満足するということは、私たちのためにアッラーが決定されたことを歓迎し、(どんなに辛くとも)自分たちに降り掛かるどんな不幸に対しても不服を唱えないこと、自分たちをどう扱われるかについてアッラーを信頼し、そしてアッラーのなされることすべてに満足するということを示します。預言者 彼の上に平安と祝福あれ)に満足するということは、無条件に彼に服従するということであり、自分の考えよりも彼のご指示やお導きを好み、そして自分の理解力を彼の行いや言葉、彼によって届けられた啓示を批判しないように使うことを意味します。イスラームに満足するということは、(イスラーム以外の教えを追求する者は、決して受け入れられない。聖クルアーンイムラーン章 3:85)で述

* この文章が "Key Concepts in the Practice of Sufism" よりの訳です。

べられているように、イスラームを理想の行動原理や規範として受け入れ、個人生活や家族生活、社会生活においてそれらを実践することを意味します。

状況によっては、このようなレベルのリダのせいで、共同体の中においても独り残されたり、残されるように感じたりすることになるかもしれません。しかし、アッラーの近くに辿り着き、預言者 彼の上に平安と祝福あれの道を追う人々は、そのように残されたと感じることはありません。アッラーと深くつながっている人は、孤独を感じることはないのです。むしろ、彼らは、独りでアッラーに祈るとき、アッラーをより近くに感じ、アッラーの愛に溢れ、「おおアッラー、私をもっと頻繁に独りにしてください。そして、あなたから私が離れてしまうことになるようなことにならないようにしてください。私にあなたが常に私と共にいると感じさせて下さい。」と言うのです。

前述のように、リダは旅路のはじめに自由意志という個人の意識的な決心によってのみ得られるアッラーからの贈り物です。リダには、信仰の深さ、宗教的行為におけるまじめさ、アッラーをまるで見ているかのような崇拝における深い意識によって達成することができます。素晴らしいリダのレベルになるには、信頼、服従、献身というレベルをこえなければなりません。自由意志でリダのレベルに到達するのは非常に困難であるため、アッラーはそれをお命じにはなりません。ただアドバイスされ、到達した者を高く評価されたのです。

もし最後にはリダのレベルに達したいと思って旅路に出るのであれば、主との関係において真面目であり、求めてはいなくとも）もたらされたアッラーからの贈り物のすべてを、アッラーの祝福として感謝して受け入れ、欠乏については語ることなく、苦悩や孤独や困難の時にもすべての宗教的義務を果たし、アッラーの前で祈るときはまるで結婚式の部屋に入る時のようであればなりません。リダの土台として最も重要なことは、心の中で絶え間なくアッラーを新しく発見しながら、意識や経験の中に常にアッラーの存在を感じ続けることです。

アッラーの懲罰に対する絶望や安心感というものはこの世においてはあり得ないものであるため、恐怖や希望は現世に関係のあるものだけと言えます。これらは、それに対して来世に与えられる報奨を除いては、来世には関係のないものです。それとは対照的に、アッラーをありがたく感じアッラーを愛することは永遠に続くものであり、アッラーの判断を甘受することやアッラーをありがたく思うことは現世と来世両方における精神的平安と幸福の源となるものなのです。

これは、リダを自分のものとしアッラーのお喜びを得てアッラーに認められた人々は、不安や困難、苦悩などから解放されるということではありません。依然として人生において悩ましいことや不快なことはたくさんあるからです。しかしながら、リダにおいて素晴らしい人は、それらを純粋な慈悲だと考えます。リダやアッラーのお喜びによって、彼らの飲む「^{カリッ}薬」は「^{カリッ}薬」に変わり、彼らの直面する悩みによって、彼らはさらに深くアッラーを愛するようになるからです。

リダの道は、進むのは困難ですが、安全でまっすぐな道です。それは時にたった一つの努力によって旅人を人

間としての完璧さという頂上へと導きます。信仰する者が、アッラーを感じ（アッラーは時間にも場所にも包摂^{ほうせつ}されることはありませんが）あらゆるところでアッラーを見つけるために、アッラーの道で非常な努力をすることや、宇宙を（それがまるで一冊の本のように）研究することによって、その頂上に辿り着くのと同時に、頂上は、進むべき道を探し求める中で会う困難に対する個人の無力さのためにもたらされる内面の苦悩や悲しみを通して、到達することができる場所でもあるのです。

リダによって、アッラーが信仰する者にご満足されるということからくるぞくぞくするような喜びや天からのそよ風という結果がもたらされ、それは個人の恐怖や希望の深さに比例したものとなります。それはアッラーを近くに感じることや、崇拜や忠実さ、罪に対する奮闘や世俗的な自分自身やシャイターンの誘惑などから来るものではありません。むしろ、それには希望や期待が合わさり、自己コントロールによって規制された精神的歓喜、アッラーからの直接の贈り物、アッラーに感謝する状態だけに結びついた慈悲の風と言えるでしょう。この状態には、思考や考慮、計画、希望、期待、感情、行動に関してアッラーのご意志に従うことが必要とされます。したがって、リダを満足や歓喜を経験するための方法だと考え、満足や歓喜を得ることを期待することは、リダという意志と誠意の純粹さに基づいている状態を軽んじていることなのです。実際には、このことは心の動きを通して得られる状態や、それ自体が心の動きそのものである状態のすべてに関して共通して言えることなのです。人はアッラーに認められることもしくはアッラーのご満悦だけを愛し求めなければならないのです。

スーフイズムの初期において、精神的に優れていた人々はリダやアッラーに満足することについての見解を表現しています。ドゥ・アル＝ヌン・アル＝ミスリによると、リダとはあらかじめアッラーのお望みを自分の望みよりも好むこと、アッラーのなさること望まれることは何であれ良いことであるという認識に基づいて、不平を感じることなくアッラーのご意志を受け入れること、そして、逆境においてもアッラーへの愛に溢れることです。アリ・ザイン・アル＝アビディンはリダをアッラーのご意志やご満悦に合わないものはすべて求めないと決心することだと説明しています。アブー・ウスマーンによると、リダはアッラーのご意志やなされることすべてを、それがアッラーのお慈悲から来るものなのか、権威からなのか、怒りからなのかに関係なく、同じ気持ちで歓迎し、その中で好みの優劣を持たないことを意味します。アッラーの預言者は「あなたが何かを定められた後には、私はあなたにリダを請い求めます。」とおっしゃられました。あらかじめアッラーのご意志に満足するということは、リダは苦難が起こった時にそれに耐えることを意味するのにも、あらかじめその苦難に対してリダを示すことが決まっているということの意味です。つまり、リダはアッラーが神・主であられることから起こることすべてに対して憤りや不満を感じないということの意味し、また、自分の運命に対して不平を感じず、受け入れて耐えることを嬉しく思い、それに備えるということです。信仰の深い者は心のバランスを欠くことはありません。むしろ、ひどく悲惨な出来事や衝撃的な出来事があっても、自分の高潔さと真っ直ぐさを保ち、天の刻板に刻まれたアッラーの定められた運命を考え、出来事に対して後悔や悲しさを感じないのです。

一般の人々にとっては、リダはアッラーが自分たちに望まれたことに対して不服を唱えないということの意味しま

す。アッラーについてのより深い精神的知識を持っている人々にとっては、リダは自分の運命を歓迎することを意味します。そして精神的に深い生活を送っている人々にとっては、リダは、自分の考えに注意を払うことなく、常に何をアッラーが彼らに望まれているか、アッラーは彼らがどのようにあることを望まれているかに注意深くあることを意味します。

「おお、安心、大悟している魂よ、あなたの主に返れ、歓喜し御満悦にあずかって。あなたは、わがしもべの中に入れ。あなたは、わが楽園に入れ。 晩章 89 27- 30)』という章句は、リダのすべてのレベルを包含し、アッラーのご意志と運命に甘んじて従った者たちの欲望に対する返答も含んでいます。

この章句に見られるように、リダの状態に達することとアッラーに満足しアッラーに満足されることは、その人がアッラーに向き合うこと次第なのです。これはアッラーに対する完全なる献身と信頼、服従、そして、すべてをアッラーに委ねることを意味します。この状態に辿り着いた人は、死んでアッラーと見えることを切望し、平穩の心のうちに死に、楽園へと迎えられるのです。

別の観点から見ると、一般の人々は、アッラーの命に従って生活し、主アッラーの権威に従順であろうとすることによってリダを示します。これは次の章句で表現されています。「アッラーは凡てのものの主であられる。わたしがかれ以外に主を求めようか。 家畜章 6 :164)』「アッラーは、アッラー以外の加護をどうして求めるだろうか。かれは天と地の創造者で、(すべてを)養い、誰からも養われない。」(6 :14)』このレベルのリダはアッラーの単一性に対する真の信仰とアッラーへの真の愛を求める人には不可欠なものです。信仰する者は誰もが意識的にアッラーのお導きに服従し、信仰においても生活においてもアッラーに何ものをも並べてはならず、アッラーだけを人類と全世界の主、創造主、支配者として愛し、アッラーの名の下に愛する価値のある人だけをアッラーの定められた限度において愛さなければなりません。

アッラーの知識を一定レベル持っている人々のリダのレベルは、異議を唱えることなくアッラーのご意志と規律を歓迎することに現れます。また、心のコントロールの強さにも見ることができます。そのコントロールはとても強く、彼らの心は一瞬たりとも逸れることはありません。このようなリダはアッラーの知識の備わった心とアッラーの関係だと考えられています。

リダの第3段階は、アッラーのご満悦を得られることに満足を感じる、浄められた信仰の深い学者たちが達成できるものです。このようなリダの報奨を得る人は、個人的な怒りや喜びや悲しみを感じることはありません。そのような人はもはや自分のために感じたり考えたり望んだりすることはなく、そのためアッラーのご意志だけが残るので、主の中に消滅するという喜びを体験するのです。





預言者としての任務における誠実さ*

預言者ムハンマドは、信託に重きを置く人として選ばれ、御自身もその緊張を人生を通して持続させられたのである。啓典がくだされると、もしかして単語を聞き逃すかもしれない、と緊張され、ジブリールが言い終える前にそれを暗唱すべく何度も繰り返しておられた。そのためにこそ、聖クルアーンではこのお方に対して次のような記載がされているのだ。

「この(クルアーンを催促するために) あなたの舌を忙しく動かしてはならない。それを集め、それを読ませるのは、われの仕事である。それでわれがそれを読んだ時、その^{どくしやう}読誦に従え。さらにそれを解き明かすのも、本当にわれの仕事である」(復活章75/16~19)

聖クルアーンは、預言者ムハンマドに信託された。御自身も、この偉大な預かりものに対して誠実でないことを恐れ、震えていた。そのためアッラーはそのお方を慰め、預言者ムハンマドを誠実な者とされることを保障されているのである。

預言者ムハンマドは、その生涯をこの不安の中で過ごされた。信託されたものに誠実であるために、他の者よりも努力され、その重い任務の重さをそのままその背中で感じられていた。だからこそ、最後の巡礼でされた説教で(後に「別れの説教」と呼ばれるようになった)、日が沈もうとする時彼も御自身の人生が終わろうとしているのだと言う意識をもって、誠実な友人たちにその重い任務を再度語られ、次のように言われたのである。「近く、私のことがあなた方に問われるだろう。」つまり、それより前に私があなた方に問う「私は任務を明らかにすることができたであろうか?」そこにいる者たちは皆、響き渡るような大声で答えた。「はい、あなたはその任務を明らかにされ、それを不足なく果たされました。」この言葉に対して預言者ムハンマドは両手を掲げられ「アッラーよ、証人になってください」と言われたのである。[†]

信頼に誠実さで答えることは、まずアッラーで始まり、ジブリールから預言者ムハンマドへと伝えられ、それからウンマに引き継がれた。そして別れの巡礼で、ウンマの証言によって、再びアッラーへと達したのである。

隠すとしたら...

最も信用できるハディースの本が伝えるところによると、アーイシャは次のように述べておられる。

* この文章は "Prophet Muhammad Aspects of His Life-1" よりの訳です。

[†] Abu Dawud, M anasik 56; Ibn M aja, M anasik 84; Ibn Kathir B idaye 5/173

もし、預言者ムハンマドが、啓示された聖クルアーンの一部を、あり得ないことですが隠すとしたら、次の章が隠されていたことでしょう。

「アッラーの恩恵を預かり、またあなたが親切を尽くした者に、こう言った時を思え。『妻をあなたの許に留め、アッラーを畏れなさい』だがあなたは、アッラーが暴露しようとした、自分の胸の中に隠していたこと（妻の妻との結婚が人の口の端に上がることを）を恐れていた。むしろあなたは、アッラーを畏れるのが本当であった」（部族連合章33/37）*

この章は、次のような背景を持つ。預言者ムハンマドは、手元で育てられた解放奴隷のザイド・ビン・ハーリサを、おばの娘であるザイナブ・ビンティ・ジャフシュと結婚させられた。しかしこの結婚は、望まれたとおりにはいかなかった。ザイナブは、ただ預言者ムハンマドの命令に従うためにこの結婚を認めたのであった。最初のところから、気の進まない結婚であったため、妻は夫に十分な尊敬を払わなかった。アッラーは、彼女をザイドから離婚させ預言者の妻の一人とすることを望まれていた。ただ、それまで、アラビア人の社会では、その人間が我が子と呼ぶ者は、彼の子供であるとする慣わしがあった。従ってその妻は、嫁となるわけである。

それ以前にもザイナブは、その母から、預言者の妻にと言われたことがあった。その時、預言者ムハンマドはそれを承知していなかった。今、彼女との結婚がアッラーから命じられていた。預言者ムハンマドにとって彼女との結婚は困難に感じられた。しかし、命令は命令である。アーイシャは、この出来事を言われているのである。ただ、預言者ムハンマドは自分にくださった神意に対して誠実であった。だから、どんなに些細なことでも隠すことはあり得なかった。

もし、どれかの章が隠されるとしたら、これがその章となったであろう。しかし彼は信託されたものに誠実であり、隠すなどということはできなかったのである。

このお方の誠実さに関するもう一つの出来事がある。バドルの戦いで、不信心者たちが捕虜になった。預言者ムハンマドは、聖アブー・バクル、聖ウマルと相談された。アブー・バクルは、捕虜たちを身代金と引き換えに釈放することを提案した。ウマルは、皆を刀で殺してしまうことを提案した。さらには、彼はそれぞれが自分と親しい者を殺すことを求めた。預言者ムハンマドは、アブー・バクルの案を好まれ、捕虜たちを身代金と引き換えに釈放された。これ以降の出来事について、ウマルの言葉を聞いてみよう。「私はあるところに出かけ、戻ってきたところだった。預言者ムハンマドとアブー・バクルが泣いているのを見つけた。地に伏して、激しく泣いているのだった。私は理由を尋ねた。二人とも答える元気もなかった。さらに尋ねた。どうか教えてください、泣くべき理由があるのなら私も一緒に泣きたい、と言った。預言者ムハンマドは泣きながら、少し前に次の章がくださったことを語られた。¹

「その地で完全に勝利を収めるまでは、捕虜を捕らえることは、使徒にとってふさわしくない。

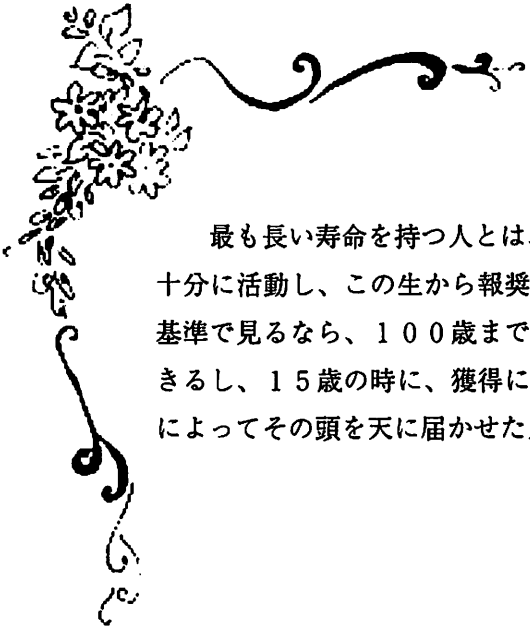
* Bukhari, Tawhid 22; M uslim , Im an 288

¹ M uslim , J'had 58; Ibn H anbal, M usnad 1/31, 33

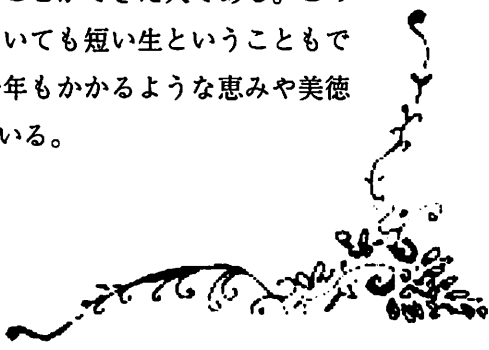
あなた方は現世のはかない幸福を望むが、アッラーは(あなた方のため) 来世を望まれる。アッラーは偉力ならびなく英明であられる」(戦利品章8/67)

もし、預言者ムハンマドがどれかの章を隠されるとしたら、二番めに候補に挙がるのはこの章であろう。しかし預言者ムハンマドは、神意に対して完全に誠実な方であられた。

この二つの章については、後の部分で、預言者ムハンマドの潔癖さを示すためにも取り上げる。



最も長い寿命を持つ人とは、たくさん生きた人のことではない。十分に活動し、この生から報奨を得ることができた人である。この基準で見ると、100歳まで生きていても短い生ということもできるし、15歳の時に、獲得には何千年もかかるような恵みや美徳によってその頭を天に届かせた人々もいる。





預言者の村

輝かしい都市マディーナ、預言者ムハンマドを迎え入れた聖なる都市マディーナはあなたをも迎え入れてくれます。ナツメヤシの果樹園、預言者モスクの尖塔^{ミナレット}、緑のドームを見た時、あなたは地にひれ伏し、声も出ない状態となるでしょう。機会があれば乗り物を降り、そのお方の村の土を目の上に塗ろうとするでしょう。

探し続けて、あなたの軌跡を見出すことができれば。

その土を私の顔に塗ったならば。

神が恵んでくだされば あなたの顔を見ることができたなら

ああムハンマドよ、私の心があなたを求めているのだ。

と言い、偉大な先人達と同じ形ではなかったとしても、あなたなりの心の高鳴りと愛情表現のうちに、あなたは預言者モスクに着くでしょう。

そこであなたは、生涯で最高の恥ずかしさを感じるでしょう。

そのモスクの聖なる主人があなたに、「預言者のもとには贈物と共に来るべきだろう、あなたは何を持ってきたのか。」と言ったら？

そう、ある意味で預言者達はその墓の中で健全であられるのです。預言者ムハンマドも健全であられるのです。異なる次元においてあなたの声を聞かれ、あなたのことを知り、天使達の媒介によってあなたの送った挨拶を受け取られるのです。

あなたはその場に立ち尽くします。無力さ、弱さがそこで明らかになっているのです。自分の無力さをいっそう深く感じています。どの行為を、どの奉仕を、贈物としてあなたは持ってこられたのでしょうか。唇は乾き、すすり泣きがそこからもれてくるでしょう。

そう、あなたの故郷にはこのお方を愛するあれほどの人達がいて、彼らの預言者への挨拶をもあなたはその背に負っているのです。あなたはそれを思い、預言者への挨拶をあなたに託した人々の名を挙げ、彼らの純粋な意志をとりなしの贈物とすることを望みます。

あたかも、そのお方の手があなたの手を取るようです。あらゆることに関わらず、その手があなた

の頭を撫でるようです。何年も暗い部屋で、カーバの写真や礼拝用の絨毯に開かれた窓からあなたが探し求めていた愛するお方が、二度と閉まらないような形でその覆いをあなたの為に開くのです。

礼拝や祝福祈願、ドゥアーによって、嘆願によって充実して過ぎていく日々の中で、土曜日を選んでクーバモスクへ、他の一日を使ってジャンナトゥル・パーキ（預言者ムハンマドの墓）へ、そしてウフドへ行き、教友達に挨拶を送り、思いを新たにし、あらゆる瞬間にそれぞれに異なる感情の嵐を感じ、少なくとも40回礼拝を行なうだけの期間、マディーナで滞在するでしょう。そこでは一秒一秒、異なる感情、思い、記憶が生じます。でもこの文章ではそれらを書き記すことはできません。

そう、預言者ムハンマドは、「それができるだけ力があつたのにハッジを行なうことなく死んだ者は、ユダヤ教徒として死ぬか、望みに応じてキリスト教として死ぬか、である。」とおっしゃられているのです。それを行なうだけの力があるのにハッジをしないことは、信仰のうちに死を迎えることの妨げになり得ることが明らかにされています。

あらゆる信者は理性において、思考において、そして心においてこの祝福された旅への備えをしていなければならない、最初の機会を生かして旅に出発するべきです。私達がここで示そうと努めたような感情を抱くことが例えできなかつたとしても、アッラーのご命令に従うという意志で、ハッジを行なうべきなのです。

アッラーの使徒からの呼びかけ

預言者の村からの呼びかけを待つ人として、イマーム・アザームの話を紹介して、この文章を締めくくりたいと思います。

イマーム・アザーム・アブー・ハニファは51回ハッジを行ったことが知られています。知っていることを教え、知らないことを学び、イスラーム社会の苦悩への道筋を見出す為にそれだけのハッジを行なったのでしょうか。それは知りえることのできない問題です。しかし伝えられているところによるなら、彼は最後のハッジで夢を見ました。そしてその夢で、もはやこの都市に来ることがないだろうということが告げられたのです。

イマームは、これほどハッジを行なったにもかかわらず、アッラーの使徒の御前に、そのお方のおられるその場に入ることができずにいました。近づくことができなかったのです。恐れ、恥じ入り、「あなたは何を持ってきたのか。」と尋ねたら返事ができない、という不安の中にいたのです。何十年も、モスクの最後列で礼拝を行い、それからチャドルに戻り、泣いていたのです。「あなたが呼んでくださらない限りあなたの御前に参ることはできません、アッラーの使徒よ。」と訴えていたのです。何年もこういう状態を続けてきたのです。最後の巡礼と告げられたことで、その年の悲しみはより深いものとなりました。全ての礼拝の後で涙を流し、「どうか、アッラーの使徒よ、一回だけでも私をお招きください。」と泣いたの

です。

ある時、他のある人が預言者の墓に来て、このお方に対し願いました。「アッラーの使徒よ、あなたのところにやってきました。あなたの客となりました。財産を失ってしまいました。空腹です。私を助けてください。」この人の求めたものは全て物質的なものであり、それなりの人物に過ぎませんでした。しかし彼は、心からの訴えを行っていたのです。

突然覆いが開かれ、預言者ムハンマドはこの客にお答えになりました。「某所のチャドルに行きなさい、そこにヌマン（イマーム・アザーム）がいる。彼に言いなさい、アッラーの使徒があなたに挨拶を送り、呼んでいる、と。」

この人は預言者ムハンマドを見たという興奮のなか、言われたとおりのチャドルにやってきます。そしてチャドルの覆いを開きます。中には一人、髪とひげと涙が一緒くたになってしまったような老人がいました。この老人は「一度でも、来なさいとはおっしゃっていただけないのですか、アッラーの使徒よ！」と泣いていました。訪ねてきた人は聞きます。「あなたがヌマンですか。」すると「何か私にご用ですか。」という返事が返ってきました。

そして、何年も待ち続けた奇跡が起こったのです。

「アッラーの使徒があなたに呼びかけておられます。あなたをお呼びです。」

イマーム・アザームは身をしゃんと起こし、この奇跡の為に備えておいた一袋の金をその人に差し出し、「どうか、今の言葉をもう一回お願いします。」と言ったのでした。もう一回、もう一回……。その度ごとにマントやターバンを贈り、そして彼は泣きながら走ったのです。そのお方のもとへ。

今度はあなたが望んでみてください。招待を求めてください。罪や過ちを洗い流すべくあなたが流した涙の全てのしずくを、このお方を愛する人達があなたに託した焦がれるような思いを、そしてこの上なく澄み切ったあなたの意志を贈物にして、あなたもこの祝福された旅に出てみてください。あなたにも彼方からの奇跡が示されるかもしれません。





オクタゴンさんからのメールです...

ずっと前の“いい話”というメールをおくってもらってとても感動しました。遅いかもしれませんが、ありがとうございました。

その中で生きることに恐怖や不安をかかえ閉じこもる若者について触れているのが印象的に残っています。わたしも何年もそれを観察していて彼らを取り巻く家族、人間関係、社会に悲しい思いを抱えていました。

不安や恐怖は“安心”を知るためのほんの初歩。

“恐れ”、“不安”を感じる人には答えが待っている。

ただ、それを素直に出しにくい社会環境が出来上がってしまったことのほうが残念ですね。今の社会のあり方が、孤立する人を増やす肥やしとして機能してしまっているように見受けられます。

“無”の意味を恐れ、答えの無い人生に不安を感じる時がある、というのはどんな偉人も経験してきていることで決して彼らが特別に弱い、とか異常なことなのではありません。彼らが人間として正常な感性を保持している証です。むしろ、何かに対する恐れも何も感じない人はかえって憐れだと思えます。

“勝ち組み”、“負け組み”の言葉をひろめた人、その言葉にショックを受け、“負け組み”のレッテルを張られんがために、ハウツー本を買いあさり、右へ左へと振り回され、取り残された人達を上から得意げに見下ろす優越感に浸る、そんな人達を憐れに思います。そしてそんな彼らが子供を育てていることに、私は恐怖を感じます。

望んでか、望まぬか、誤った信念のもとに勇気と正当性を誇示して戦うすべての人々を私は憐れに思います。大きな戦争に限らず、身近にあるイザコザも根は同じ。ひとりひとりの心にしっかり根をおろしてしまっただ誤解、誤った情報を鵜呑みにしての個人やコミュニティへの攻撃、ネガティブな欲望、といった雑草がモウモウと生えほうだい。

それが人間の当然の姿としてとみなし、“だって、人間だもの！そんなもんだよ！”と豪語する人の多いこと。誰がその雑草を刈り取ってくれるのでしょうか。

見る見るうちに伸びた雑草に早く自分で気が付いて刈り取り、手入れをはじめめる人は、それが骨の折れる作業で痛みを伴う作業であっても、幸運な人だと思います。たとえそこで怪我をしても、です。

だって、つぎには甘い果物のなる木を植えることができるでしょうか？もし、そんな立派な木ではなくとも、低木でもしっかりした常緑樹を植える準備に入れます。そして、今度はどうしたら素敵な花を咲かせたり、実をならせるか、幹のしっかりした健康な木にしようか、と真剣にこつこつ学ばせよう。。。

今度は素敵な仲間も一緒かもしれません。

誠意を持って、こつこつ学ぶ、作業をすすめる、耐えることも学ぶ、学ぶ、学ぶ、学ぶの繰り返し。正しい、よい知識が重なっていくのは楽しいこと。また雑草が出てきたらこまめに刈る。ちょっとムズムズするな、と感じたら害虫を疑って点検、駆除！年をとって、おばあさんになることなんて気にしてられないくらい忙しいはず。むしろ大いなるお方にお会いできるまでに、一生懸命磨きをかけなくては...

知識はひらめき。ひらめきはまたひらめきを呼びます。光のうえには光が。。そのうえにまた光。

ある先生が勧めてくれているのが、魂のためのダイエット。ラマダーンの時、(もちろんその月以外でも)特に気をつけてやってみなさい、と。ゴシップ、陰口、嫉妬、いじわるな感情、疑念といった“食べ物”と一緒に食べて食べないように！と。そしてそういうものを自分も人に与えないように、と。エネルギーの無駄遣いだ、と。

虫の居所が悪いとネガティブな感情を放出して一見、すっきりしたように感じますが、実はその時ものすごいエネルギーを放出しているようです。そしてその一部は形を変えて自分のところにしっかり戻ってきます。またそこにエネルギーを使い、不満を貯めて投げ返す、別の形でもどる、また返す、戻る、.....

フィジカルな断食とともに、ぜひ悪い心の傾向(考え方の癖)に向き合い素直にそれを認識して、しっかりそこで断ち切ることができるように。魂のためのダイエットも意識してみようと思います。

かぎりないアッラーの御加護と愛を願いそこに頼ります。





年老いた人々へのメッセージ

10 番目の希望

捕虜の身から解放された後の一時、イスタンブールでの二年間は、再び迂闊^{うかつ}さが打ち勝っていた。政治的雰囲気^{うきぐわい}が自我から注意を遠ざけ、外的世界に関心を向けさせた。ある日、イスタンブールのエイユプスルターンの墓が見える高い場所で、腰を下ろしていた時のことである。イスタンブールの周りの外の世界を見つめてみた。すると、私の個人的世界が死に、ある方向に魂が引き寄せられるような夢の中にいる状態に突然陥った。「もしかしたら、私の名がこの墓場の墓標に書かれた印なのだろうか。だから、私にこのような夢を見させているのだろうか。」と私は関心を持った。はるか遠くではなく、その墓場を私は見つけた。

心が気付いた通り、「これはあなたの周りの墓場。100ものイスタンブールがその中に存在する。なぜなら、100回以上もイスタンブールはこの中に過去に放たれた。イスタンブール全ての人々をここへ放たれ給う力強い英知なるお方の支配から、逃げ残ることなどできはしない。あなたもやがて行くことになる。」

私は墓場から出て、この恐ろしい夢のことを思いながらスルタンエイユプモスクにある以前何度か入ったことのある小部屋に今回も入ってみた。そこで自分自身のことを考えた。そして私は三つの点で客人であると悟った。この小さな墓に客として入るように、イスタンブールでも客であり、この世でも客である。客は旅の先を考えなくてはならない。いつか私はこの小部屋から出て行き、ある日イスタンブールからも出て行く。そして最後には、この世からも出て行くのだ。

さよう、このような状態の最中、何とも悲しく恐ろしい痛みを伴う^{つら}花^{はな}しさと苦しみが私の心と脳天を襲った。なぜなら、私はただ一人か二人の友を失うのではなく、イスタンブールの何千人もの私の愛する親友達と別れるのであり、同時に大変愛したイスタンブールからも離れることになるのである。

この世の十万もの親友達と別れるのと同様に、私がかよなく愛し慣れ親しんだ、その美しい世界からも別れるのだと考えながら、もう一度墓場の高い所を訪れた。時々教訓を得るために映画に足を運んだのだが、映画には一瞬にして過去の陰影を現在から眺め映し出すことができるように、私にも過去に出会った人々が歩き回る死体のように見えたのだった。そこで、私の幻想は語り始めた。「この墓場に住む者たちの一部は、映画で歩き回っている人のようにも見えます。将来必ずこの墓場に入る人々を、もうすでに入ったかのように変えて見てご覧なさい。彼らも死体であり、歩き回っているのです。」

突然、英知あるクルアーンの光とガウスルアーガム、シャイフゲイラーニー師の導きを通して、その悲惨な状態は楽しい幸せな状態に変化した。それはこのようである。

その悲惨な状態に対し、英知あるクルアーンの光はこのように警告した。北東のコストゥルマとい

う異郷の地には、捕虜となった将校の友が一人か二人いた。これらの友がイスタンブールに行くことをあなたが知っていたことにしよう。あなたに誰かが、「あなたはイスタンブールに行くのですか。又は、ここに留まりますか。」と尋ねたら、そうであろう、多少とも脳があれば、楽しくイスタンブールに喜んでいくことを受け入れたであろう。

なぜなら、1001人の友のうち999人がイスタンブールにいたからだ。ここで一人か二人残った。彼らもそこへ行くこととなる。あなたにとって、イスタンブールに行くことは、悲しい別れでも苦しい別離でもない。すでにあなたはやってきた。幸せになったであろう。その敵の国のとでも暗く長い夜から、そして大変寒い嵐ふく冬から救われ、この美しい世界、天国のようなイスタンブールにやってきたのだから。同様にあなたが幼少の頃から今日まで、あなたの愛するものたちは、100人のうち99人があなたの恐れている墓場へ移動したのである。この世に残った友人も一人か二人いる。だが、彼らもそこへ行くのである。この世での死は、別れではなく出会いである。その友人達との再会である。彼らは、つまり永遠の魂たちは、古びた我が家を地下に置き去り、一部は星々を、一部はバルザフ界の層を歩き回っていると気付かせてくれた。

さよう、この真実をクルアーンと信仰が大変詳しく立証したのだが、良心が完全になく精神が欠けていないのなら、そしてまた、誤りが良心を締め付けなければ、それを見たかのように信じるべきである。限らない贈り物と賜物によって、この世をこのように飾り、気前よく慈しみ深くその主性（主であること）を示し、種子のように最も意味のない些細なものでさえ、保護する寛大で慈悲深い創造者が、創造物の中で最も完全で理解力のある重要な存在、最も愛される存在である人間を確かに外面的にも示されるように、無慈悲に目的もなく、絶滅させることなく消し去ることもない。おそらくある農夫が、土にまいた種のようにもう一つの生命の中に種を作り出すために、慈悲深い創造者は、その愛すべき創造物を恵みの扉である土の下に一時に放っておくのである。

さよう、このクルアーンの警告を得た後、その墓場はイスタンブールよりもより親しみ深く私には思えてきた。独居生活と隠遁生活が会話や交際よりも、より喜ばしく思えた。私はボスボラス湾のサルユエルに隠遁場を見つけた。ガウスルアーザム（ゲイラーニ師：神が彼を嘉し給いますように）のフトーフルガイブによって、彼が私の師であり医師であり、案内役になったようにイマームラッバーニ師（神が彼を嘉し給いますように）のメクトゥバートによって、彼は親友となり、愛しい人となり、先生となった。その時老齢期に入ったことや、文明生活の楽しみから遠ざかったことや社会生活から身を引いたことを大変幸せに感じたのだった。

さよう、私のように老いに足を踏み入れた方々と老いに気付き死を思い起こす方々よ。クルアーンの与え給う信仰の教えの光によって、私達は老いと死と病を黙認すべきである。いや、愛すべきである。そもそも私達には信仰という限りなく有益な恵みがあるのだから。老いは心地よく死もまた心地よい。もし心地よくないことがあるならば、それは罪であり、悪であり、ビドアであり誤りである。



魂と死

永遠という感情や永遠への願望は、ただ、永遠というものへの候補でありえる魂にのみ特有のものである。有限であり、はかない存在である物質は、決して永遠という思想の源にはなりえない。細い電気線が、高圧電流を運ぶことができるだろうか？ 現象界において、人の内なる鏡、そしてその思考に、永遠の生という願望を反映させ、このような感情を発酵させるような例は存在しないのであり「これから得た」*といえるものはない。そうであるなら、有限である体の細胞、原子を超えたもう一つの世界を望み「私ははかない存在だ、私ははかない存在は求めない。私は無力であり、無力な存在は求めない。私は望む、無限の友を」¹と語るのは、無限に焦がれ、永遠に心ひかれる、魂なのである。

死後、体の機能が停止するのは、魂が体を残して去ったためである

死者の目は開けられたままのこともある。しかしなぜその目はものを見ていないのだろうか？ 肉体という兵舎の、細胞という兵士たちはなぜ散っていったのか、なぜ作用しなくなったのか。答えは簡単である。司令官がそれを残して去ったからであり、魂という太陽が沈んだからであり、体という鳥かごから魂という鳥が解き放たれて無限の世界へ飛び立ったからであり、肉や骨といった家の一時的な客が荷物をまとめて鎖を断ち切って、旅を続けに行ったからである。そう、魂なのだ。驚くべきことである。肉体を見てほしい。六十年も生き続けてきたのに、その後は60日すらもつことなく、バクテリアに分解され、腐敗してしまう。長い年月一緒にいた私の目よ、なぜ、数分でさえも、私に、親友を、本を、花を、見せてくれないのだ。

死には方策は見出されない

死に、一時的な命の彩りが与えられることはある。つまり、細胞や、心臓の鼓動、脳の機能などによって死んだとされた人が、心臓マッサージや電気ショックによって、あるいは器官や体を凍結して保存することによって、あるいは発達した装置や発見によって、特効薬によって、生き返ったように見えることがある。しかしこれは、決して死んだ人が生き返ったというのではない。このような状態において、体の機能から見ると死んでいるかのように見えたとしても、魂が肉体とのつながりを保ち、体という発電体につながっていたコードの一部がまだ抜かれていたために、これは生死の境ということができるのである。例えば、カセットで説教やクルアーンを聴くために装置にカセットを入れた場合、装置が作動していても

* サイドナルシー、17番の言葉

音量が完全に絞られていた場合、まったく音が聞こえない。こういう場合あなたはこの装置が壊れていると考えるだろう。しかし実際にはそれは作動していて、音を出していないだけなのである。ちょうどこのように、預言者ムハンマドのその明確な通告にあるように「全ての病に方策が見出されるだろう」しかし、魂が肉体という衣装を完全に脱ぎ捨て、発電機につながれたコードがすべて抜かれ、体につながる鎖が完全に絶たれるという意味で「死に方策は見出されない」のである。この観点から、一部の人々が、死んだように見受けられる人が生き返ったと語るのは、装置が作動しているのに音量が消されているという以上の意味はなさないのである。

死者のために行われる気遣いや行為は、腐っていく肉体に向けられたものではない

この問題を法学的な面から捉えるなら、魂がその場を放棄した瞬間より後に段階を追って行われる、死者の洗浄からはじまる一連のイスラーム上の儀式がある。白い布で包んだり、運ばれたり、礼拝が行われたり、埋葬したりといった行為…。睡眠不足になり、走り回り、泣き、周囲に知らせること…。隣人や親戚たちが恐らくは初めて、こういった形で一堂に集うこと…。揺すぶらないように棺が運ばれること、前を通る際には起立が行われること…。これらは全て、腐って土に返っていく死体のために行われるのだろうか？ クルアーンを読むこと、祈りを捧げること、後に残った遺品が思い出として取っておかれること、壁に掲げられた写真、思い出をたどってはため息がつかれること、これらの全てが、とっくに土になった細胞のためだろうか？ 信仰を持たない人々の世界にすら、死者がミイラにされたり、記念碑に花束が置かれ、敬意が払われたり、ひざまずかれたりすること、革命の殉死者という呼ばれ方、これらは悪臭を放ち、溶けてしまった汚い残存物のためだろうか？ 全ての生物をその細部まで決定付ける遺伝の暗号への作用の命令はどこからきているのだろうか？ DNAやRNAと共に、細胞の活力や原子の活動を支え、整えるのは何であろうか？ 物質的な要因は全て整っているにも関わらず、多くの研究の後で「細胞でさえ命のあるものがつくれない」と認められているのはどうしてだろうか？ アッラーの存在、死後の生命、そしてそれを生きさせる魂、これらはお互いに結びついている真実ではないだろうか？ 魂という真実は、復活や勘定が問われるという思想、残虐な者や抑圧者が、それぞれ罰や報いを受けるという信仰、社会生活において子供たちや若者や老人、病人や健康な人たち、要するに信仰を持つ全ての人にとっての一つのブレーキ、規律、均衡、そして幸福への要因ではないだろうか？

教えを否定する人に、例えば「魂や審判の日がなかった場合、信仰による私たちの損失、否定によるあなたの益とはいったい何であろうか？ まだこの世界にいる時から信仰する人々が得ている徳、人間性、幸福が、あらかじめ与えられる益であるとすれば、あなたのその悲痛な有様を何というべきか。その上でもし、最後の審判があるのであれば、私たちの状況とあなたの結末はどのようなことか」というのは、私たちの正当な権利ではないだろうか？

死後、魂がたどる経過

人と動物はその創造、実態、特徴から異なっているのと同様、これらの死もまた、異なったもので

ある。人間の魂は天使イズラーイール（アズラーイール）自身、もしくはその補助者が持ち去っていくが、動物たちの魂は任務を負った天使ではなくアッラー御自身がお取りになる。

預言者たちには天使イズラーイール自身が訪れる。そして多くの場合、訪れたことを知らせる。例えば預言者アダム、ムーサーの場合そのようになった。さらに、信頼できるハディースによると、その魂を取り去る事に関して預言者ムハンマドから許可を求めたとも伝えられている。イズラーイール自身が訪れない場合は、魂の段階に応じ、イズラーイールの補助者によって、もしくはイズラーイール自身の監視によって魂が取り去られる。

それぞれの人に、それぞれに異なる天使が遣わされるのは、敬意と栄誉のためである。各人に、魂を持ち去る天使が存在する。なぜなら人は、被造物のうち最も名誉を与えられ、最も完成された存在だからである。人という奇跡が、こういうあり方の必要性を生じさせる。一人の人間は、他の何らかの生物の種の全てに等しいと見なされる。そう、人は一つの種であり、同時に全種に値する。そしてそれぞれ的人是、自らの運命と共に生きる。あるハディースで述べられたように、人には固有の記録簿と三百六十の天使が存在する。人は、与えられているあらゆる栄誉に加えて、永遠というものへの候補となりえる崇高な魂をも持つ。だから、彼の前に伸びる永遠の生の名において死ぬのだ。この特別な性質、立場の要するところとして、その魂をもイズラーイールあるいは任務を負った天使によって持ち去られるのである。

動物に関しては、先にも述べたように、単純で全般的な判定が下され、それらの魂はアッラーによって取り去られる。なぜなら動物は人間のように責任を負ってはならず、また知恵や意識、認識、そして未来と関わる魂の持ち主ではないからである。動物たちはあの世においても永遠の生を生きることはできない。そして、アッラーの公正さの顕示として一時的に復活させられるとしても、天国や地獄は動物たちにとってそれぞれに個別のテーマではない。ただ、洞窟に隠れた信徒を救った犬（洞窟章 18/22）や、預言者サーリフのラクダ（フード章 11/61-63）、預言者スライマーンのヤツガシラ、預言者ムハンマドが説教するとき支えるもたれられたナツメヤシの枝、といったようなもののみが天国に入り、そこで自らの種を代表するのである。

人と動物の間の違いは、次のようなものに似ているだろう。ある国で、国家の治安の攪乱や革命を企画した人々のうち、高位にある者、高い階級を持つ者は軍事法廷にかけられ死刑判決を受けるが、階級のない兵士たちはただ、武器を没収されるだけである。動物や植物たちにもこのように単純で全般的な判定が下される。しかし人間はその栄誉、地位、そして責任に応じてそれぞれが尋問を受け、裁かれるのだ。

魂はどのように取られるのか

人間は限られた意志の力で、天使の業を把握することができない。天使たちは、霊的な存在であるため、時空の制限を受けず、同時に何千もの地点で姿を見せることができる。これは、何百もの鏡がある部屋に入った人が、同時に何百もの鏡に出現するようなものとなる。イズラーイールが同時に複数の魂を

取り去るのも、このようなことである。

人を真の意味で死亡させるのは、アッラーご自身であられる。しかし、死者の顔の外見的醜さをアッラーに結びつけ、アッラーに対し不適切な考えを抱くようにならないよう、アッラーは、イスラエールをその御業の覆いとされたのである。

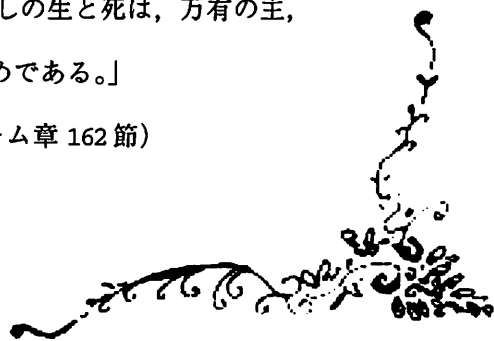
死をもたらす何らかの要因（病気や災害や事故など）が現れると、人がすぐにイスラエールと結びつきを持つことになる。だからイスラエールがその人を探す必要はない。例えば、様々な周波数で発信を行なう一つの装置があったとしよう。そしてこの装置が一つのスイッチで、千の周波数で発信を開始すれば、同時に多くの装置を停止させることができる。それぞれが一定の周波数で一致して、同時に発信するので、その発信は容易に実行される。アッラーの御業においても、このような働きと、それによってもたらされる簡明さ、容易さが存在する。一つの命令によって何千もの兵士が行動すること、太陽が、同時に何千ものガラス片に、そして小さな泡に、七つの色や明るさ、熱とともにその姿を現すことなどのように、死の周波数が一致している人々は、イスラエールが触れることによって魂を譲渡する。あたかも、一つの主電源スイッチを切ることによって、同時に何百ものシャンデリアやランプが消えるように…。



犠牲祭の時にお薦めされる祈り：

「わたしの礼拝と奉仕、わたしの生と死は、万有の主、
アッラーのためである。」

(アル・アンアーム章 162 節)





与えられた命の重み

江住 よしえ

最近のニュースでは自殺についてのものが多いことに気がつきます。そして日本にはいじめによって苦しんでいる人がたくさんいるということが改めて分かります。いじめによって死を選択するという心情はいじめられた本人にしか分からないといいますが、私達ムスリムは自殺が禁止されているため、どんなに辛いことがあっても決して死を選択することはできません。そのため常に前向きにものごとを捉えるようになります。

私達にとって死とは、肉体を伴う善行や、日ごろの行ないの悔い改めができなくなるということも意味します。皆がよく知っているように死期というのがいつなのかは分かりませんからその日の為に常に心の準備をしていた方がいいと思います。例えば借りがあればなるべく早く返した方がいいですし、許す相手がいればその旨を早く伝える必要があります。両親、兄弟、親戚、友達、知り合いなど常に良い状態にすることがとても大切だと思います。そのためにけんかをすれば直ぐに仲直りをすることや、許すことの大切さ、両親などを大切にするというようなことがイスラームでは言われています。またよい行ないは思い立ったら直ぐにすべきだと思います。私は募金をするチャンスや、助けが必要な人を助けるチャンスを逃したことがたくさんあります。そしてそれらのチャンスを逃したことはいつまでも私の心に残っています。

自殺に関するニュースに加えて、少し前には母親による子供への虐待や殺害という信じられないようなニュースが度々放送されていました。ショッキングなニュースであることに驚くのはもちろんですが、私達がそんなニュースを見慣れたものとしていることにもショックを受けます。日本社会ではあまり「生」や「死」について日常で考えるということがないと思います。それははっきりとした答えが分からないのでそれらについて考えることを避けているのだと思います。限られた生命や、必ず訪れる死、そして精子と卵子というとても小さな細胞から胎児、子供、成人、年寄りと変化する様をみれば奇跡的な感動を覚えるはずで。仕事や人間関係を考える前にもっと根本的な一つの生命としての自分自身を考えるべきだと思います。私がおっと若い頃にはどうして生きるのか、どうして死ぬのか、死んだらどうなるのかと考え始めるとすごく恐かったので、考えないようにしていました。でもそれらについて考えることを避けるのをやめた時、つまり正面から向きあうようになって初めて自分が生きていることを実感したような気がします。それまでは何不自由なく楽しく生活をしていましたが、なにか違うという思いが常にありました。生や死を考えながら積極的に受け止めて生きるということで私の人生に対する態度は一変しました。

【ワンダフルライフ】

今月の本誌のテーマは「死」となっています。このことは人生の一大事ではありますが、例えば家族でその話をするということはあまりないように思います。我が家では、母から「いかに生きていいのか」という話は聞いた事がありますが、「死とはどういうものか」「死をどう捉えるべきか」という話を聞いたことはありません。「死」に関しては、葬式はどうしてほしいとか、墓はどうしたいだとか、家の墓に入りたく無いだとか、そういう現実的な話しか聞きませんでした。

私に目を向けてみますと、祖母が数年前になくなったり、同世代の友人のうちでも何人かは亡くなっていたりすることもあり、他の人が「死ぬ」（とりあえず、目の前から物理的にいなくなる）といったことにはそれなりにそういうものかとも思えますが、自分の事についてはどうでしょう？

自分の死というもの、また、死んだらどうなってしまうのかというのとはなんとなくハッキリしない事柄ですし、きっとこうです、こうなるんですと色々な人に言われても納得しづらいものです。言葉では「ああそうか、そういう風になるのか」と納得しても、それがシッカリ腑に落ちるという事はなかなか難しいのではないかと思います。特に日本では、これといって皆が共有している死生観が無く、死後はなんとなく魂のようなものが直接天国に行ったり地獄に行ったりしているような気がします。また、死んだ人が「高いところから見守ってくれている（又は害を為す）」と無意識的に捉えているのが一般的なんじゃないのかなあと思います。

しかし、死んだ後や死そのものに関してどうい説明や解釈がされようが、とりあえず、人は「死ぬ」という状態になることに変わりはないのでしょ。そう考えますと、死というものを見つめる、死について考える事は、そっくりそのまま、そのターニング・ポイントまでいかにして生きるかということを考える事でもあるように思えます。

今回ご紹介するのは、今の世界とも死後の世界ともつかぬ、中間の地点にまつわる物語です。

霧に包まれた古い建物に人々が集まってくる。そこで待っていた「職員」に「あなたは昨日お亡くなりになりました。ここにいる間に、あなたの人生を振り返って大切な思い出を一つだけ選んでください」と言われる。彼らはこの施設で天国へ行くまでの七日間を過ごす事になっており、各人の選んだ思い出を職員が再現フィルムとして撮影し、最終日に上映会を開くのだと言う。そのプロセスを経ないと、どうやら天国にはいけないようだ。

関東大震災の思い出を選ぶ86歳の江戸っ子の女性。太平洋戦争中のフィリピンのジャングルを選ぶ85歳の男性。明日から夏休みという一学期最後の日を選ぶ50歳の男性。赤ちゃんを出産した瞬間を選ぶ30歳の主婦。女性経験を楽しそうに話し続ける男、選ぼうとしない青年…。皆があれこれと大事な思い出を決めていく最中、職員である望月の担当した70歳の男性は平凡な人生に思いを巡らせるが、なかなか思い出を選べずに困っていた…。

この、どうしても思い出を選べない老人の人生を振り返る70本のビデオ（そんなものがこの世界にはあるの

です)を見ていくと、とても平凡でありきたりの人生で、そのことでまたこの老人はガッカリします。『どうせなら自分が生きた証がわかるような出来事を選びたい』とはいったものの、そんな出来事が無い自分の姿に幻滅していつてしまうのです。

この老人の人生には、確かに華々しい出来事が無かったようにも思えます。ですが、思い出を既に選んでしまっている人達の思い出も、実はさほど素晴らしいものではないような気がします。自分の人生のポイントとなる出来事ではありますが、見方によっては些細な事だったりします。でも、それがその人の人生に占める割合は大きく、それによって『ああ自分の人生はこうだったな』と思えるのでしょ

大病もせず、不幸のどん底に落ちるわけでもなく、貧乏をしたわけでもなく、キレイな女性と普通に結婚し、普通に歳を取り、70歳まで生きて亡くなった老人というのは、傍から見れば『超幸せ者』としか言いようがありません。幸せだと思った時間だって、生きた証となるポイントだって、山のように見つかりそうです。でも、見つけれない。与えられた幸せに気づかない。それがこの老人の人生を覆う不幸だとも言えるのではないでしょ

そう考えると、人と比べてどうこうと言うより自分に何があって何が無かったか良く考える事、そして小さな事でも大事に思える事というのは、人の人生にとってかなり大切な事、重要視しなければいけない事のように思えます。今生きている時間で起こった様々な事ひとつひとつを大事に、そしてありがたいと思ふ気持ちが無ければ、傍から見てどんなに幸せそうに見えても、自分自身には不幸にしか感じられないという事ですものね。これは人生の一大事なのです。

この映画は、『あの世とこの世の境についての面白いアイデア』『死後の世界の一つの解釈』というだけでなく、寓話的に『生きることは何か』『足るを知るとはどういうことか』を語ってくれる話でもあります。『こんな世界あるわけないじゃん』と思わず、皆様も自分のこれまでの人生を振り返りつつ、先にも思いを馳せながら、是非一度ご覧下さい。

『ワンダフルライフ』 1999年 日本 118分

監督：是枝裕和

出演：ARATA 望月)／小田エリカ (おり)／寺島進 (川嶋)／内藤剛志 杉江)他



「先生の診療 まだ時間はかかるけど 傷口としては順調 退院は金曜日くらい

今後の身のふり方を考える。

洗濯はいつするか？何を持って帰ってもらうか？本は？本を読み続ける体力が無い。

焦らない方がいい。ポーッとするためにここにいるんだから。あと、しゃべりにくいのって舌がマヒしてるから？いや違うよな…

昨日おもしろかったこと。咳の寸止め。

最近してないこと。 あくび、大笑い、走ること（早歩きさえ）」

これは、去年 2005 年の 11 月 28 日月曜日に、私が「入院ノート」に書いたつぶやきです。

喉の手術の日から 4 日目、すごくしんどいわけでもなく、かといって完全に回復したわけでもない、微妙な状態の体と、焦る心のアンバランスでゆらゆらしていた時期でした。そして、この日が朝夕の点滴最後の日。11 月中に退院できると思っていて、12 月 2 日が退院予定日だと言われ、少ししょんぼりした日でした。大好きな読書も、なぜか長時間続けられず、がっかりしていた時期でした。かさぶた形成時で、手術直後に次ぐ、第二の大量出血の危険性があったので、激しい運動は控えないといけませんでした。入院中なんでもともと、そんな激しい運動をする機会もないし、走ったりする必要も無いと、普段は思うのですが、あの時は、「するな」と言われると妙につらくて、走りたい走りたいと思っていました。

朝には、「初めて朝まで一気に眠れた」と書いています。前夜の夜中の 2 時、痛みで目が覚めてポーッとしているところを、看護師さんに発見され、就寝前にも痛み止めを服用することになったのです。

「今日は窓から青空をみた。雲もみた。夜景もみた。きもちよかった。」

これが翌日です。

「FlipFlop 入れ替える。こういうのと、こういうの どっちも元気になった。」

一体何をしたのかと言うと、廊下の窓際に置いてあった、ソーラーで葉っぱが動く観葉植物（のおもちゃ）2 つの、場所を動かしたのでした。誰かのお見舞い品で、廊下を通る人のほとんどが目目していたこの観葉植物、1 つは日当たりが少なく苦戦している感じで、もう 1 つはちょっと元気すぎる感じだったので。どちらも元気になったら良いなあと、こっそり場所の入れ替えを決行。結果的に企みが成功して嬉しかったのです。

そしてまた次の日。前夜に血と組織のようなものが出たことを医師に報告。左のかさぶたがとれ、血がにじんでいるが、ドバッと出血する兆候はないと言われて安心しました。ちっちゃい組織、ときいて、「おっれっらっは かさぶた団っ！」と歌詞つきでノートに絵を描いたりしています。退院も決定。

「PM .5 : 0 0 痛い 特に左が。右は変なもんがひっかかっている感じ。

妙に咳したい感じだけど、痛いからやだ」

などと書きつつ、夜には「アッラーへの感謝で泣く」とあります。

退院前日の日。退院の前に、「屋上に上がって景色を見てみたい」と看護師さんに質問を執行。すげなく却下されました。最近、最初から屋上には上がれないようになっているそうです。シャワーはほどほどに、堅いものもまだ×、と言われた記述があります。

「PM .1 : 30 くらい。右の変なもん、とれた感じ。鏡でみるとまだ膜張ってる。

2 : 00 向かいのおばあさんに、退院おめでとうと言ってもらう。すごく嬉しかった。

3 : 00 痛い。

4 : 30 お腹空いてんだけど、痛くてムリ。」

そしてとうとう、12月2日、無事退院しました。たった1週間あまりで、街はがらっと雰囲気が変わり、すっかりクリスマスモードに包まれていました。ナースステーションの近くで、看護師さんたちがクリスマスツリーを用意していたのを思い出しました。ノートには、1日の朝の10時ごろ、「看護師さんがクリスマスツリーの用意をしている」と書き、屋上を断念した後、「クリスマスツリー見る」とあります。

今ではその全てが過去のことで、退院した日は、あのクリスマスな街の感じを見た時、私が病院にいた時と同じ時間が、外でも流れていたんだと、不思議に感慨深かったことを憶えています。

1年経った今でも、折にふれてこの入院ノートを見返しています。通常の「生きる」よりほんの少し、意識的にささやかな我慢や努力をして(指示通り、うがい薬を日に4回、もその1つです。一瓶なくなりました)、何かが起きても、いつもよりもっと小さなできごとばかりだけれど、その小さなことにすごく喜んだり、驚いたり、笑ったり(顔の下半分の筋肉は動かさず)して、生きていた日々。その日々を思い出すと、ほんの少し、また元気になる気がするのです。



購読価格(郵送料込み) バックナンバーは、1部 200円(日本以外は1部 250円)

国内: 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外: 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号:00100-6-354012 口座名義:月刊誌やすらぎ

三菱東京UFJ銀行 店番号:630(春日部) 口座番号:1134374 口座名義:月刊誌やすらぎ
皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuagiweb.com> info@yasuagiweb.com yasuagi_nihon@hotmail.com

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部